渾沌会

（九州大学芸術工学部・九州芸術工科大学 同窓会）

おひさしぶりの

ReMember

●渾沌マークは九大芸術工学部のシンボル。そのデザインは、数年に渉り幾度か微調整されたが、最終的には創設期の原型に戻った。

最後の卒業証書。

あの統合から足掛け4年となる今年。一部の学生を除いて、『九州芸術工科大学』の名前で発行される卒業証書は、これが最後になってしまう。歴代の諸先輩を通して、脈々と今日に引継がれてきたビジョンある限り、証書の発行所にこだわるべきでは無いはずだが、過渡期のさ中を駆け抜けた熱き学士たちに、その想いを聞いてみた。

●雲田 健　工業設計学科

九州芸術工科大学から九州大学へ、変わりゆくモノと変わらないモノの混じり合った時に居合わせたことで学生時代を2倍楽しめたんじゃないかなと思います。

●岡部 桂以子　音響設計学科

「また会おうよ、『木』の下で。」芸工大の喜怒哀楽をじっと眺め続けたあの『木』の雄大さと優しさ、内なる熱さは 先輩方から私たち、そして私たちから後輩たちへと。

●佐藤 睦美　環境設計学科

「大学どこ？」と聞かれ、「芸工大ってところだけど今は統合されて…」「じゃあ九大生なんだ」「いや私たちの代まで芸工大生で…」というまどろっこしい説明も、履歴書で必ず枠いっぱいに埋まる大学名も、後輩たちはもう誰も使うことができない。自分が芸工大生だと意識できるこれらの瞬間を、私はとても気に入っている。

●杠 奈津枝　環境設計学科

正門をくぐり抜けて噴水の横を通り、大きな木へと向かって歩くのが好きだ。これは4年間変わらなかった。晴れた日は日差しと風がとても心地よい。人は変わってしまうかもしれないけれど、せめてこのキャンパスは残ってほしいなぁ。何度でも遊びに来たいから。

●鳥越 寛史　工業設計学科

僕たちが九州芸術工科大学生として卒業する最後の代だということで、なんとなく寂しく感じています。でも、九州芸術工科大学生としての志は僕達以降の代にも受け継がれていくものだと信じています。

●岩谷 成晃　音響設計学科

朝は早く起き、飯を朝昼夕と三食食べ、夜は早く寝る。知らない人とすれ違うときは挨拶をする。芸工大の精神はこういう日々の心がけのようなものなのだろう。心に留めて守っていれば暮らしが豊かになり、不思議と日々がうまくゆく。寝る布団が変わったところで、僕は早起きをやめるつもりはない。

●徳田 麻由美　画像設計学科

芸工大として最後の学園祭の火祭りでみた”伝”の火文字は今でも忘れられない。学園祭と共に、これからもずっとエンターテナーで溢れた大学であってほしい。

●三宅 佑治　芸術情報設計学科

後輩達と接するうちに感じた。九州大学という新しい血を持つ彼らは、変わってしまった、昔は良かった、などと言われ続けることに耐え忍びながらも、彼らなりの「芸工生」をつくり、彼らなりの「芸工」をつくり、この変革期を駆け抜けている。私は、そんな体験ができる彼らがうらやましくてしょうがない。

●山本 俊一郎　芸術情報設計学科

当時、次々と書き換えられてゆく芸工大関連の標識を見つけるたび、寂しさと共にここまで続いてきたものが壊れゆくのではないかと不安を感じたものだった。が、今ではそれは必要な変化だったと感じている。芸工大＝九大芸術工学部では、やはりない。しかし、新たな流れを汲み入れた事で、芸術工学は、次のステップに進んでいるのかもしれない。

●生嶋 就　画像設計学科

4年間を通して、大学全体で少し学内に向き気味だったベクトルの傾向がだんだんと 広がりを見せてきた、と感じています。はじめは統合をどこか残念に思っていましたが、芸工大らしさもきちんと後輩に受け継がれているようで、KIDの愛称とはお別れですが、よりすばらしい学部に成長するだろうとを密かに期待しています。

残したいもの。

名簿再考

芸工大生と九州大学芸術工学部卒業生は『芸術工学』を志す同志として、まさに渾沌のままに包括されるべき朋友です。統合を機に、皆様方から広くご意見を頂戴し、我々同窓会は「入学時の大学名称を問わず、芸術工学を学んだもの同士が交流を深める組織」として、これまでの同窓会組織を基盤とし、発展的な活動を継続して参りました。「卒業生に対するサービスのみならず、現役学生に対する活動を通して芸工大のアイデンティティの継承を目標とする」との方針は、今後ともに一貫させたい所存です。

統合は、大学名称を超えて『芸術工学』を軸に、人的資産を育むことによって、さらなる発展を目指すことが一つの目的でした。が、そのためには卒業生のネットワークの形成、コミュニケーションの緊密化が必要です。そのベースとなるのは、やはり＜充実した名簿＞であろうかと思います。この名簿に名前を列ねることは、会員各位にとっては、自分と朋友、先輩諸氏との連絡ターミナルを構えることでもあり、同窓会としても、その発行は会員各位の絆を結ぶ意義ある事業と認識しております。
が、個人情報保護法の観点や、各種勧誘に悪用される問題、発行に関わる費用等、その運用に関して見直しを迫られている時期でもあります。さらに掲載事項の選択化やデジタル化配布等についても、役員会で検討を重ねております。これらの点につきましては、近い時期に皆様にアンケートを行うことを計画しております。その節は、ご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

●名簿の発行を控えて

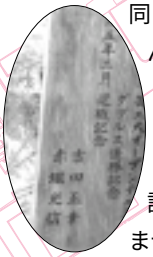
2008年度の発行計画を控え、これに要する発行費用が切実な検討課題です。統合によって、それまであった絶好の会費徴収のタイミングがなくなり、徴収率が低下していることは定期総会でも報告したとおりです。役員会にて結論した改善策の第一弾は「会費の納入・未納の不公平をなくす」ことです。未納者リストも整備できましたので、他同窓会の動向や手法も参考にしながら、＜未納者対策＞を実施予定です。
実は「入学生の保護者にとって卒業生の動向や同窓会の様子は重要な関心事である」ことが、これまで何度か指摘されていました。そこで、今回は、納入者・未納者を問わず、渾沌会の現役学生に対するサービス活動の紹介文を添えて、このReMemberを保護者宛に送付することを、試みます。

統合を機に『同窓会の意義、あり方』を再確認しましたが、これを確実なものとして、今後に渾沌魂を引き継いでいくためにも、皆様方のご協力を、よろしくお願い申し上げます。

本部会長：藤田啓晴（音響8期）

記念植樹

先日、芸工大同窓会の役員の方から会報(Remember)への執筆を依頼され、まことに嬉しく思いました。私は 1974年に芸工大に着任し、皆さんには電気工学などの講義をしました。そして 1995年に定年で退職しました。この21年の間、よくテニスをし、1990年には一般教育の赤堀さんと組んで、芸工大オープンテニスのダブルスに優勝しました。偶然かもしれませんが、赤堀さんとは同じ年齢でしたので、一緒に定年退職しました。それで、赤堀さんと相談し、ダブルス優勝と定年退職を記念して、テニスコートの近くに泰山木(たいさんぼく)を植えました。植えたときは私と同じ位の大きさでしたが、10年経った今ではずいぶん大きくなっています。



記念の植樹は楽しいですよ。植えるときは小さくてもかまいません。10年、20年経てば大きくなりますから。同窓会全体としてでも、クラスの卒業記念としてでもいいでしょう。そして、その近くに芸工大という文字が入った説明文を掲げることをお勧めします。いつまでも残りますから。私達の泰山木の説明文と同じように。

投稿／吉田正幸（九州芸術工科大学名誉教授 元共通専門）

プラン例●2期生のメモリアルグッズは「錫の盃」だった。今後の企画としては、入学記念品であってもいいのでは。

魂を伝える渾沌グッズ

芸術工学の魂は、環境・工業・画像・音響・芸術情報という５つの設計の切り口で受け継がれ、まもなく40年。平成20年度に入学される方々は、芸術工学を学ぶ40周年目の記念すべき入学生となります。また、この三月の卒業生を送りだせば、九州芸術工科大学という名称は公的に終焉を迎えます。そこで、これを契機に、渾沌会でメモリアルグッズを企画～制作してみてはどうでしょう？もちろん、企画の企画段階ですので、グッズの種類からスタイリング、販売経路なども未定です。九州芸術工科大学の追憶のため、これから芸術工学を武器に社会へ挑む、私たちの仲間となる若いデザイナー達へ、先輩である私たちのデザインで、記念品を創ってみませんか！？

渾沌会から、ひとつ提案がございます。この記念品は、毎年その内容が異なると良いですね。年度ごとに一種類、完全限定にしたいと考えています。その案を毎年渾沌会会員の皆様へ、広く公募致します。若き後継者たちへ、熱き芸術工学魂を伝えたいあなた、多くの応募をお待ちしております！

●●●●応募フォーマットなど、詳細はウェブで●●●●

投稿／牧野剛己（音響27期）

偲びたい40年の歴史と偉大なる創始者

皆様　こんにちは。音響１期の小林　哲です。昭和43年に開学した我が母校も今年で足掛け40年を迎えることになります。これまで、多くの卒業生が世の中へ輩出され、「芸術工学」の理念を実践し、理念に根ざした技術の発展と進化に貢献されているものと確信しております。こと音響の世界においても、芸工大の卒業生は縦と横の連携・連絡が緊密で、まるで織物の縦糸と横糸のような組織が出来て

いるという世評を耳にすることがあります。例え音響そのものにかかわりがあってもなくても、共通の理念や理想が我々の絆を作り上げているということに誇りを感じています。
このような我が母校ではありますが、今年３月に学部を卒業する学生を最後に、「九州芸工大生」の呼称は過去のものになってしまいます。この４月に４年生となる学部生は「九州大学　芸術工学部１期生」ということになるわけです。一つの楽章が終わり、新たな楽章が始まるわけですが、これらは全く無縁のものではなく、脈々たる大きな流れの中にある夫々の「群」であろうと考えます。

かように、意味深長で重要な年を迎えたわけですが、加えて昨年はこの「芸術工学」という新たな学問の礎を築かれ、多くの実践者を教育された牧田康雄先生がお亡くなりになった年でもありました。音響学の泰斗というばかりではなく、大学の理念構築と教育方針の確立に腐心された偉大な教育者であり、哲学者でもあった方でした。これもまた、節目の１つ、止めようのない時の移ろいの無常さかもしれません。

このような節目を何らかの形として認識し、「けじめ」の一つにするため、今年６月３日に『芸術工学／音響設計40年の歴史と創始者牧田康雄先生の業績』と題したシンポジウムを開催し、芸術工学40年の教育がどのように進められ、どのような成果を残してきたか、これからの研究／教育への期待は何か、芸術工学を実践してきた人たちの思いは、などを語り合う場にしたいと考えております。また、交流と懇親という意味合いで在校生と卒業生の合同での演奏会、昔懐かしいバンドの再結成なども是非実現させたいと考えております。音響設計学科以外の方にも是非ご参加いただき、「九州芸術工科大学は永遠に不滅」であることを確認する会に出来ればと望んでおります。皆様のご参加と、ご協力を心からお願いする次第です。

●詳細はＨＰにて：http://www.geocities.jp/kid_hamamatsu/

東京ミッドタウン進出のお知らせ

（九州大学・芸術工学東京サイト）

2007年３月31日にグランドオープンする東京ミッドタウンは六本木防衛庁跡地に建設される複合建造施設で、その開発理念を「日本のデザイン力」とし、文化と芸術の発信拠点を目指します。総事業費は3800億円、年間2500万人の来場を見込み、六本木ヒルズと同等の規模になります。九州大学芸術工学研究院は、高等教育機関として、財団法人日本産業デザイン振興会及び社団法人日本グラフィックデザイナー協会と連携し、デザインの主たる発信拠点を担うことになりました。私たちはこのミッドタウンタワービル５Fに150m²のオフィスを構え、芸工院38年間のデザイン成果をセミナーやワークショップ等で発信し、芸術工学の知名度を高めるとともに、企業・団体等との連携による外部資金の獲得を目指します。また、芸術工学の紹介や模擬授業を展開することで学部や大学院への優れた受験生を獲得していきます。
私たちはこの芸工拠点を「九州大学・芸術工学東京サイト」と名付けました。ここには談話スペースも確保する予定です。いずれこの場で同窓生の皆さんと懇談の場を設けたいと思います。芸術工学発展のために、皆さんからいろいろなアドバイスを頂きたく、宜しくお願い致します。芸工東京サイトには卒業生の津留さん（工業25期生）が常駐します。お近くへ来られたときは是非お立ち寄り下さい。お待ちしております。

安河内 朗（工業５期）

○ 3/30(金)に芸工東京サイトで「同窓生とのオープニングパーティ」を開催します　○ パーティのほか、詳細はWEBをご覧下さい
http://www.design.kyushu-u.ac.jp/g-parn/

2006年開催　通常総会報告

昨年は芸術工学座談会の後に通常総会を開催しましたが、今年は逆順での開催を試みました。これは、現役の学生が参加する座談会で盛り上がった流れを、その後の懇親会へそのまま持ち込み、現役学生の参加を少しでも多くすることを狙ったものです。幸い、思惑が当たり、懇親会へは多くの現役学生に参加していただけて大盛況でした。
通常総会は例年の手順で進行し、全ての議案が承認されました。

2005年度の主な事業報告

名簿のメンテナンスに関して『名簿利用申請に対する承認と拒否の事例』が事務局より紹介され，渾沌会ホームページに記載されている個人情報保護方針に則った管理をしているとの報告がありました。また決算報告に関して「繰越金が年々目減りしていることもあり、適正な運用の検討をして欲しい」との要請をいただきました。これに関しては，2006年度事業計画の柱でもある会費ワーキンググループにおいて検討していく旨の回答がありました。

2006年度の主な事業計画●会費ワーキンググループ

九大との統合以降に会費の徴収率が低下していますが＜納入呼びかけの工夫＞などにより、徐々に改善しつつあります。入学時の徴収と併せて，未納者からの徴収方法についても検討していきます。＜会費の効率的運用＞については，一例として総会案内などの電子化(Email)による通信費削減という案が出ましたが，名簿の判明率低下に繋がるといった新たな問題が懸念されます。また，名簿の有料化という案も出ています。このように，会費の効率運用は名簿と密接に関わってくる問題でもあるため，総会以降、月に１回のペースで本部役員会にて検討を進めているところです。

●芸術工学座談会の開催

芸工大創立の６月を芸術工学月間に定着させるべく、毎年開催しています。2006年の座談会では、芸術情報設計学科としては初めての開催となりました（詳細は本号紙面別頁）。

●通常総会への若年層参加促進

冒頭に触れましたように、今年度は少しでも多くの現役学生に懇親会へ参加してもらえるような工夫をしました。同窓会主催の懇親会に参加することで同窓会を身近に感じてもらい、将来的に通常総会へ参加してもらえるきっかけになればと思っています。この他にも来年度の総会へ向けて色々知恵を絞っているところです。

●懇親会

今年も福岡サンパレスにて開催しました。１期生による熱いトークなどもあり、大いに盛り上がりました。冒頭で触れましたように、今年は現役の学生さんにも多数参加いただきましたが，蒼々たる先輩を前に「歳は離れていても同じ芸工大生なんだと感じた」との印象をさらりと披露。卒業生の存在を身近に感じてもらえたようです。

本部役員：川瀬康彰（音響23期）

『私の仕事』LIVE版！2006

思い知ったか、現役生諸君!! キャンパスを突き抜けた先輩達の熱い**芸術工学**を!!

芸術工学座談会運営事務局
河原一彦(音響16期)

環境設計学科テーマ
発注者と受注者の視点で環境デザインを考える

語り部：都甲康至（8期）Vs近藤英夫（16期）

私にとって、もっとも身近に、そして親しみを感じることのできるのは同窓の先輩方。実際に社会で活躍して得られた経験談を聞くことは、私のこれからの将来を考えていく上でも、非常に有効な機会であった。お二方は、発注者と受注者の、それぞれの立場にたったリアルな話をしてくださった。机上で学んできた論理は、先輩方の講義のワクから飛び出したナマ話で裏づけされ、より深い知識に結びついたように思う。

●絶対の信頼、そして共通の目標

まず都甲先生は、大日本印刷の勤務を経て、2006年の春に芸術工学研究院応用情報部門の教授として、再び、この大橋キャンパスに赴任してこられた。話は、以前に働いておられた大日本印刷の新オフィスビルの建築プロジェクトに携わっていた時のこと。施主として設計事務所の人と一緒になって、よりよい自社ビルを構築していった過程をわかりやすく話してくださった。新オフィスビルの建築にあたっては、ビル全体のことや、会社の経営方針、運営管理、セキュリティシステムなどを受注者に的確に伝えることが重要課題となってくるのだが、大きな建造物になればなるほど、細やかな配慮に欠けがちとなる。それゆえに施主側も、設計事務所と同様に、建築に関しての勉強に迫られる。本当に適したものを作るには、一体どうしたらいいのか？それは、発注者と受注者の信頼が絶対不可欠であり、そのためには、共通の目標設定が基本になると話してくださった。

●言い分は違っても想いは同じに

また近藤先生は、『client & me』というテーマに沿って、自ら設計事務所の責任者としてご活躍なさっている経験を事細やかに、いくつかの事例で話してくださった。発注者とは、企業、個人、官公庁、またマスコミと、様々であり、それぞれの場合に応じて、多様に応対されている様子は、とても魅力的に思えた。先生は、建築のほかにも、とある村のまちづくりプロジェクトにも携わっておられ、建築を幅広く捉えた仕事をされている。設計にあたっては、受注側として背負ういくつかの困難が伴う。乗り越えてこられたのは、発注側への丹念な意思疎通の努力有ればこそ。これは、前述の都甲先生の話とも一致しており、発注側と受注側の物つくりへの思いは共通していると感じた。「いくらデジタル化が進む世の中でも一番大切なのは両者の綿密な対話」だという見解が印象的であった。

今回、同時にお二方の話を聞けたことは、とてもラッキーなことだった。発注側も受注側も、相手の立場で言い分を受け止める思考パターンは、これまでの自分には無いものだった。

●パワーの源は、学科を超えたキャンパスライフ

お二方共に、学科で学んだ以外のキャンパスライフが、今の支えとなり、パワーの源となっているとのこと。ご活躍の源流は、このキャンパスのなかにあり、その多くの出会いの中で育んだ、充実した学生生活にあるのだろう。私も諸先輩方に負けぬように、充実したすごし方を見直してみよう。このキャンパスの良さを最大限に生かすことが、これからの私の人生の鍵となるはずと、強く感じた。

レポート／大学院博士前期課程1年　高丘敦子

画像設計学科テーマ
世界にはこびる画像設計学科の分身たち　~おいしいDNAの育て方、伝え方~

語り部：笹栗哲朗(8期)Vs 黒葛原寛(8期)

今回、講演をしていただいたのは、KBC報道制作局長の笹栗さん(8期)と、ソニーグローバルソリューションズ(株)ウェブサイトマネジメント部の黒葛原さん(8期)のお二方。

コーディネーターの脇山先生による開会のご挨拶のあと、まずは笹栗さん。モラトリアム状態だったという学生時代の過ごし方から、人生を変えたドキュメンタリー番組との出会い、カメラマンになり放送業界に入ってからのことなど、ご自身の体験談を中心にお話していただきました。そしてお話の最後に、『みなさんに贈る言葉』として「創造の源は外(現実)にあり、そこで目にしたモノをキッカケに、自分しか持っていない才能を開花させることが学生にとって一番大事なのだ」との熱いメッセージ。これは是非、心に留めて置かねばならないと痛感させられるお言葉でした。

続いて黒葛原さん。ご自身の経歴紹介のあと、ソニーに入社されて以降、これまで手がけてこられた映像作品を、７分ほどのハイライトで見せて頂きました。製品カタログの紹介VTRから、メディアアートとしての動画作品やアーティストのプロモーションビデオまで、その活躍の幅広さを目の当たりにしました。所属、経歴をとってみても、宣伝制作部、ビデオ事業部（マーケティングや商品企画）、映像ソフトセンター、ホームページ室、そして現在のウェブサイトマネジメント部総括長というマルチっぷり。「他学科の授業も含め、４年間１～５限を取り続け、120%昇華・燃焼した」という学生時代の“貯金”(このお話には、参加した学生誰もが衝撃を受けた様子…)があるからこそ成せる業なのでしょうか…。個人的には、笹栗さんのような、大学時代の過去を覆す“出会い”の方に、ついつい期待してしまうのでした…。特に印象に残ったのは、『振り返って思うこと～Visual Communication Designの実践』の中で「Visual Communication Designし続けている」という言葉。黒葛原さんは、「目的達成のために相手方に視覚媒体を使って意志を伝達する仕事の連続」と言い換えていらっしゃいましたが、現役学生としては『画像設計という学科目の社会における役割』というものを再認識できたように思います。また、著作権で苦労されたご経験から「著作権はどこに行ってもぶつかる問題。それを乗り越えるための法律的知識は学生の内に勉強しておくべし」とのことでした。確かに著作権は誰にとっても大変身近な問題であるし、それを具体的（専門的）に学べる授業があってもいいのでは？と感じました。

黒葛原さんは最後のまとめとして、全てのジャンルに共通し、かつ「これに尽きる！」とイチ押しされたデザインポリシーは“人間と人間のコミュニケーション”。そして笹栗さんと同じく「創造性、独創性、そして先進性が大事！」と結論されました。

脇山先生は、「お二方には学生時代の過ごし方など相違点もあるものの、どちらにも共通して言えることは“未来が見えていた”ということである」と総括。

今回はちょっと参加者が少なかったようでしたが、（実際に世に出てご活躍されているOBの方々による）“企業の生の声”が聞けるという貴重な機会を逃すのはもったいない！もっと多くの学生が参加して、会全体がより盛り上がっていくといいなあと思う今日この頃なのでした。

※ 最後にお二方から一言ずついただいたメッセージ

●現実を見てください！躊躇することなく外の世界に飛び込んで下さい！／笹栗さん

●まだ積極性が足りないように見える…もっと自分を自己アピールして積極的に行動できるようなってほしい！／黒葛原さん

レポート／画像37期　緒方悠記子（3年）

音響設計学科テーマ
生涯、音響設計　ニッポンはオレたちが静かにする！

語り部：福島昭則（10期）Vs　藤本卓也（17期）

音響特殊棟スタジオに50席を越え、立ち見も出るほどの超満員。まずは司会の藤田さんから座談会後の懇親会の連絡。鳥原技官の「飲み会に行ったら面白い話が聞けるよ」との声に、多数の学生が手を挙げました。「わからないことや言いたいことがあったらどんどんチャチャを入れていきましょう。あと、今回の話はオープンに話しちゃいけない話もあるかもしれませんのでそこらへんは取扱注意で」とも。本原稿も黒塗りになっていたりカットされた部分があるかもしれません（笑）。

●人間の感覚には蓄積していく騒音

最初に、自己紹介も含めて、音響コンサルタントという仕事についての説明。主なものは、道路、鉄道、航空機や集合住宅の騒音測定、または環境アセスメントのための騒音振動予測などとのこと。４月に入学したばかりの１年生もたくさん来ていましたので聞いてみたら、やはり、音響用語がわからず、難しく感じた部分もあったようです。印象に残ったのは「騒音振動は物理現象としては拡散消滅するものであるが、人間の感覚的には蓄積していくものだ」という一言。その他多くの環境問題はありますが、騒音は最も身近で感覚に障るものなので、音響コンサルタントの果たす役割は大きなものだと感じました。

続いて、おふたりのこれまでに手がけてこられたお仕事の紹介。福島さん（ニューズ環境設計）のお話は、裁判にもなった国道43号線の騒音問題や、関西国際空港の建設時に騒音がどれだけ遠距離伝搬してくるかを調査したりなど。藤本さん（四元音響設計）は、大橋キャンパス３号館の残響可変室の音響設計、多次元で模型実験を行った新幹線のパンタグラフ遮音板の開発など。残響可変室の壁に設置されたアクリル製の吸音構造を床に落としてしまい、傷をつけたそうですが、竣工のときにはずっとそこに人が立って隠していた、というエピソードも。「それは知らんかったわ。」と藤原先生も苦笑いでした。

●愚痴の中に見えた日本の未来

さて、ここからが本題（？）の愚痴の話。その一つが環境アセスメントについて。以前、平面道路上に高架道路が重なるような道路の騒音予測を相談されたそうです。この時は、多重反射や複雑な回折があり、従来の予測手法である官公庁のマニュアルでは対応できないと判断。二次元数値波動解析による予測・評価を提案されたそうですが、「前例がない、マニュアルにない、上司および上級官庁に説明できない。」という理由で却下されたとか。結局，その案件は別の会社が受注したそうですが，「一体，どうやって予測したんでしょうね～？」って。また、とある鉄道建設にあたっての騒音問題訴訟では、被害をうける原告側が敗訴。判決では騒音対策で基準を満たすことは可能であるとされましたが、新聞記事によれば実際には住宅（中層住宅）から高架まで70ｃｍしかない場所もあるとのこと。一般的な鉄道騒音の評価は、鉄道から一定距離、離れたところで行うそうです。福島さん曰く，「その地点で基準値を満足していれば手続き上はＯＫかもしれないが，離れ70ｃｍの住宅の生活環境をどうやって保全するんでしょうね～。」そのほかにも、騒音被害を住民が訴えても、役所はたらい回しにするケースが多々あるとか、裁判に負けない限り法律は変わらないとか、たくさんの興味深い愚痴ばかり。ここで鳥原技官が「役所やら弁護士やら、末は大臣に、もっと音のことをわかってる人がいてほしい」と一言。これまでの愚痴からすれば、まったくそのとおりだと思いました。

●まずは10年間がんばって

最後に、福島さんから「起業はマスコミが言うほど楽じゃない、やめといたほうがいい」とか、「会社運営はお金がかかる」とか、社長としての貴重な経験談が。「『まずは10年間がんばってみては』と藤原先生に言われて音響設計学科を卒業し就職したが、10年もやると，仕事に愛着も出てくるし，施主もできるし，このまま行くしかないかな、っていう気になります。」と、ありがたくも深いお言葉で座談会は終了。この原稿では書ききれないほど、たくさんの面白いお話を聞かせていただけました。学生や卒業生からも活発に意見が出たし、笑いどころもあり、また次回の座談会が楽しみです。

レポート／音響34期　志道知行（大学院博士前期課程2年）

工業設計学科テーマ
芸術工学の多様性、工業設計の可能性

語り部：大橋重臣（24期）Vs　高須学（26期）

在校生を中心に約40名が参加。講話は竹細工職人として活躍中の大橋さん（Ohashi Bamboo Works）とショップ内装などのインテリアデザイン事務所代表を務める高須さん（タカスガクデザイン）のお二人、卒業から約10年を経た卒業生の姿に、聴講した学生たちは将来の自分を重ねてイメージを膨らませたことでしょう。

●デザインとは個人の作品制作に非ず

先ずは大橋さんが現在に至るまでの足跡を作品のスライドを交えて紹介。本学を卒業後、別府高等技術専門校を経て、早野久雄氏に師事した後、現在では独立して工房を営む大橋さんは、竹を編み始めてしばらくデザインとは「個人の作品制作」という意識であったと語ります。それがMGMホテル（アメリカ・ラズベガス）のレストランの大型照明を制作する頃から「周囲の人との関わりにおいて、いかに良質なものを提供できるか」という意識に変化していったというエピソードは非常に印象的でした。また、自分に経験のない仕事のオファーが届いた時の心の葛藤から、「やってみたい」という自分の本音に気付き、それをやり遂げるまでの紆余曲折は、これから同じように創造的な仕事に従事するであろう学生たちにとって貴重な体験談でした。

●夢をあきらめない強い気持ちを持つこと

続いて、高須さんからは飲食店や美容室、オフィスといった多様な生活空間から、大川市の木工技術とコラボレートした家具など、多岐にわたるデザインの実例をご紹介頂きました。数多くの「デザイン」を世に出す立場となった現在、改めてデザインの要素一つ一つに目を向け、実験的な試みを通じて深く洞察する姿勢は学生にとっても刺激的だったのではないでしょうか。お二人の根底にあるのは「ものづくりへの探究心と熱意」であり、それが人を惹き付けるお二人の魅力であるように感じました。会場は、それまでの話しを踏まえ「夢」や「友人」、「幸せ」といった７つのキーワードを基にしたゲーム形式のフリートークに発展。お二人とも企業に属さずに個人で活躍されているということもあり、学生からは「将来への不安」に対するストレートな質問も出ましたが、これにはさらりと笑いつつ「前に進もうとする強い気持ちが最も重要」という力強いお答えを頂きました。また、もう一つ重要なのは人と人との繋がりであり、中でも芸工大の仲間との繋がりは10年経っても大切だという言葉には実感が込められていました。最後のメッセージは夢をあきらめないこと。強い気持ちを持ってそれぞれの道で活躍するお二人の姿があってこそ、この言葉には強さが宿っていました。どんなジャンルであっても強い気持ちで自らの道を切り開く、その根底は芸工大でこそ培われるという結びを受け、盛会のうちに終了いたしました。

レポート／工業24期　佐伯謙吾（工業設計学科助手）

芸術情報設計学科テーマ
人と情報を結ぶ（つなぐ）デザイン

語り部：冨安悠（1期）Vs 根之木靖世（3期）

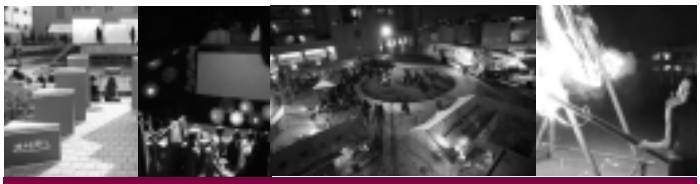
芸術情報設計学科（以後芸情）は他学科と比べ，創設時期が1997年と歴史が浅い．これまで芸情の学生にとって社会人OB・OGといえば芸情以外の他学科であるのは当たり前のことであった．しかし今回の芸術工学座談会で初めて芸情の卒業生が講演を行う運びになり，これまでの芸情の足跡を確認する上で楽しみな座談会であった．講演者は富安悠氏(芸情第一期・日立公共システムエンジニアリング)，根之木靖世氏（芸情第3期・富士フイルムデザインセンター）の二名であった．

富安氏は今年で社会人6年目．公共分野でのシステム開発を行っており，その中でWEBサイトのプランニング，デザインを担当している．講演の中で富安氏がインタフェースデザインを担当したソフトウェア（グッドデザイン賞受賞）の紹介から始まり，アクセシビリティ・ユーザビリティをキーワードに，自らの仕事内容を丁寧に説明していただいた．「芸術工学入門では客観的視点からものを見る力を学び，その重要性を社会人になってから強く感じた」等，実体験を基に率直な社会人としての考えを教えてくれた．

根之木氏は今年で社会人2年目．富士フイルムデザインセンターに勤務しており，現在インタフェースデザイン，先行開発デザインの両方をこなしている．企業内でのデザイナとエンジニアの関わり合いをわかりやすく説明していただいた．その中でデザイナの活動領域が拡大していること，デザイナが関わることの重要性，これらを根之木氏が実際に担当したサービスを例にエンジニアとデザイナのやり取りを再現し，具体的にどのようにデザイナが企業内で機能しているかを示してくれた．

富安，根之木の両氏にいえることは，デザイナという立場でモノと人とをつなぐ仕事を日々こなしているということである．デザイナとはスケッチをして外観を作るだけの職業ではなく，その製作工程において存在する要素をまとめ，それを同じデザイナ，エンジニア，さらにはエンドユーザに伝える役目を持つことは芸術情報設計学科の学生であれば誰もが思うことである．それを体現している両氏の講演を聞くことができたのは，私たち在学生にとって大きな刺激となり，勇気となった。

レポート／芸術情報3期　馬場哲晃



私は忘れない、炎の前で涙した朋を
今年も学祭への支援、ありがとうございました

携帯電話で天気予報を調べていた。降水確率６０％…、一抹の不安を押さえつつ１９時から始まる前夜祭へと向かった。舞台の多次元デザイン実験棟ホールにはすでに多くの芸工生達が入場していた。テーマは『manua』。manu-(手の)とmania(熱狂)から成る造語である。ライブの盛り上がりは最高だった。僕自身、耐え切れず観客にダイブしてしまう程に。

初日は晴れ。開会式は副委員長２人の司会。開式の言葉、聖火隊入場、開祭宣言と続く。聖火台の炎が燃え盛る中、第三回九州大学大橋キャンパス芸工祭は幕を開けた。テーマは『変えるキッカケ、芸工祭』。今はまだキッカケでいい。変わるのではなく変えるという意識をまず持とう！というコンセプトである。学務課の深海さんは今年で芸工を退職される。最後の記念になればとの思いから開式の言葉をお願いした。芸工の母として僕達を見守ってくださり、ただただ感謝。今年も模擬店、フリーマーケット、芸工紹介展、フライパンライブなどの企画がめじろ押し。個人的には『井尻寮事務室』の模擬店が目を引いた。僕自身、寮生なのだが、寮の事務室がそのまま模擬店になったよう。ソファーにテレビ、極めつけは寮で流行っているジュースの販売まで。去年から始めたフリーマーケットには３０店もの出店を得た。学外からの出店も多く、子供連れやお年寄りも来てくれた。芸工紹介展には、多くの高校生や、佐世保の中学生までもわざわざ。これをキッカケに芸術工学を学ぶ意識が芽生えてくれたらと思う。フライパンライブには、暗くなってきても客足が絶えなかった。夕方、多次元棟でＤＡＮＣＥＰＡＲＴＹ。僕も一緒に特製Ｔシャツを着て、見るだけではない参加する体験を楽しんだ。

２日目は雨。やはり、客足が鈍い。屋外で開催予定の噴水企画は、日程と場所と内容を変えることにした。苦労した企画の一つだったので非常に残念だった。企画メンバーはもっと悔しい思いが…。あの涙は忘れられない。この日を盛り上げたのは多次元棟の2研企画。テーマは『2cm』。エントランスが祭りの出店を感じさせる構成で、映像・光・音が、花火のはかなさ、あでやかさを演出。そのクオリティの高さに感激した。３年目にして始めて見る企画だった。

最終日はＣＢＡProject２００６のファッションショー。テーマは『イロ、イロイロ』。実際に見ることはできなかったが「モデルを演じている子が、いつもと違う雰囲気で可愛かった」という声が。メイクや衣装はもちろん、考えぬいて作り上げた照明や舞台で変わるのだろう。延期した噴水企画は『噴水運行○○バス』を臨時運行。内容は少々変わったが、さすが。会場のトレーニングルームからは常に笑い声が響いていた。やがて、あたりも薄暗くなった頃、火祭りの儀式へ。爆竹の音とともに聞こえてくる雄叫び。御輿を担いだ火祭り隊が登場。まずは一人ずつの気合い入れ。全身を震え上がらすような声を発し、豚の頭にかぶりつく。いよいよ松明に聖火の種火が入る。舞台はグラウンドへ…。火祭り隊が踊り始める。「過去３４年間、火祭りに雨は無い」、先輩からこれを聞き、僕たちの代に降らせてたまるかという思いがあった。しかし…、炎が力を弱めはじめた。どんなに力強く踊っても、雨は止んではくれなかった。悔しく思いつつも、我がメンバー総勢５００人を率いて火祭りの輪に。一瞬にして火やぐらを囲む大きな円が完成。これが最後、灰になるまで踊り続けよう。これまでの楽しさ、辛さ、いろんな想いが頭を駆け巡り、誰の顔も雨と涙でグシャグシャ。火祭り隊長が炎を移し、今年の火文字『朋』が燃え上がる。志や目的を同じくする人、仲間という意。祭りを作り上げてきた朋、支えてくれた朋。思い通りにいかない時、辛さを分かちあえる朋がいたからこそ、ここまでこれた。くずれかけた火やぐらを囲み、締めの「ソォーイ！」。こうして僕たちの芸工祭は幕を閉じた。

レポート／芸工祭実行委員長　画像設計学科3年　長谷川浩司

「私の仕事」

学生時代と、基本は変わっていない気がする。

中村三郎（音響8期）
株式会社　グリオ代表取締役

九州芸術工科大学は、私の原点だ。音響設計学科を卒業して早くも28年の月日が経つが、在学中の4年間が今でも私の仕事に重要な意味を持っている。当時の「芸術工学」という今までにない漠然とした題目が良かった。私を含め芸工大生の多くは現実に躊躇することなく、理想に満ちた夢を持ち、学生生活を送っていた様に思う。社会に送り出された卒業生の数も少なく、未来のレールが見えない分、夢を持つことが出来た。とにかく、講義、研究、クラブ活動で、毎日が忙しい大学生活であった。いまさらだが、当時のカリキュラムはどこの大学よりもハードで、休みが短かったことを覚えている。音響物理から聴覚心理、音楽理論まで、音に関するすべての基礎知識を学ぶわけで、音のスペシャリストを短期間で育成していた。そのことが、今でも私の仕事に大きく役立っている。

私はクラブ活動に熱心であった。特に印象深いのは、年に一度の火祭り（学園祭）である。火祭りは遊びではなく勉学以上に、みんな真剣だった。音響、環境、工業、画像の垣根を越え、学生ひとりひとりが表現者として刺激を享受しあった。私は軽音楽部に4年間在籍し、火祭りでは祭事のメインどころとなるフライパン・コンサートの企画制作を担当した。当時の軽音楽部の部員数は80名を超え芸工大最大の派閥になった。そのときの友人達とは今でも親しい交友がある。

卒業後、私はレコーディング・エンジニアの道を選び東京に出た。この職業は何の保証もない学歴など関係ない世界であった。が、幸いにも私が勤めたスタジオには音響設計学科卒業の先輩がいて、仕事の取り組み方を教えてもらった。音楽が好きな私は夢中でスタジオの現場にのめりこみ、そこでは多くのアーティストと才能に出会い、音楽制作のノウハウを学ぶことが出来た。35歳のときに独立をし、現在は株式会社グリオというモバイルコンテンツや音楽配信など音楽とWebを中心としたコンテンツの企画運営会社を主宰している。大学時代と同じで好きな音楽にこだわりながら、新しい技術を

OB版

取り入れ仕事を組み立てている。28年前に火祭りの企画運営で奮闘していた学生時代と基本は変わっていない気がする。私はアナログのマインドとデジタルのスキルを重視する。漠然と考えていた芸術と技術の融合「芸術工学」がいつの間にか、私の仕事の原点になった。これからますます広がるデジタル化社会だからこそ、芸工大生の活躍が期待される時代である。

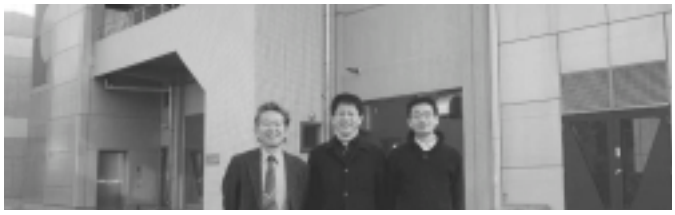
●www.griot-music.co.jp

再び学生になって思うこと。

現役版

青木幹太（工業５期）
芸術工学府　芸術工学専攻　博士後期課程２年

2003年4月、芸工大の恩師である古賀唯夫先生（九州芸術工科大学名誉教授）から、九州産業大学芸術学部デザイン学科に先生の後任として呼んで頂きました。以前より、博士号の取得を古賀先生から勧められていましたが、「忙しい」を言い訳につい取らないまま大学教員になり、この度、背中を押されて博士課程に入学した次第です。芸工大に戻ったときには、大学名から「芸術工科」の名が消えていましたが、学生時代にご指導頂いた先生やお世話になった職員の方も居られて、校舎はいささか古くなったものの、当時の雰囲気はそのまま残っていました。大学では人間工学講座に属し、安河内朗先生（工業５期）や石橋圭太先生（工業25期）をはじめ、人間工学の先生方の指導を受けております。個人的に興味のあった「身体を適度に動かすことがいかに健康に影響を及ぼすか」という中高年向け研究課題に取組み、学生のときに比べると飛躍的に進歩した設備や器材を駆使して、驚くほど熱心な毎日？です（写真）。



企業人から大学教員に転身したのが、ちょうど50歳のときで、モノを相手にする製造業から、人を相手にする教育産業に変わって４年になります。その間、企業の実務経験は学生の指導や教育に大いに役立ちましたが、何かが足りないなあというのが実感でした。例えば、工学部では殆どの教員が博士号をもっていること、自分はそれなしに博士課程の学生を指導できるのかといった不安です。そんなこともあって、社会人学生をやっているわけですが、若い学生や留学生に混じって実験室や図書館で勉強するのも悪くない、いや、むしろ新鮮で刺激的です。

これからの大学は、企業経験者など様々な分野から人材を求めると思われます。本学の卒業生の中にも、現在、企業に居て将来、大学教員を希望されている方も少なくないように思います。私の拙い経験から、いくつか要望などを述べさせて頂きます。

①デザイン系の学科では実習指導が多くなるので、管理職になっても実務経験は続けておくほうがいい。特に私立大学は、何でも「やる・やれる」です。私も芸工大でいうところの「基礎造形」から「人間工学概論」まで、担当しております。
②教員採用時に業績評価があるので、私の反省を込めてできれば早めに博士号を取得しておくといい。また学会発表や審査付き論文の実績があるとさらにいい。私は企業に勤める前の大学助手のときに、学会発表や論文投稿をやらせて頂いたのが、企業から大学に移るときの実績として認められたようです。
③企業内教育をベースとした教育は、役に立たないので注意する。学部教育は、18歳から22歳ぐらいを相手にするので、企業内教育をベースにしても学生は理解できません。我々が学生のときに受けた教育を思い出して、教育プログラムを考えることをお勧めします。

私が大学院に入学した翌年、大学の同期の友人が後輩として同じ講座に入ってきました。「五十の手習い」じゃないですが、皆さん大学でお勉強をしませんか！

熱い想いを語り継ぐ ---------- 同窓会 自主企画　『芸術工学 座談会』

私の仕事「語り部」募集中

●私的デザイン論 ●成功と失敗 ●悦びと苦悩 ●叱咤激励 なんでもOK。
詳細は同窓会事務局までお問い合わせください。同窓会ホームページ（下記アドレス）にてお問い合わせの際は、氏名・出身学科・入学期をお書き添え下さい。

http://www.alum.design.kyushu-u.ac.jp

情報フライパン

同窓会事務局だより

本部　2007年度も「私の仕事Live版」に乞御期待！

本部会長：藤田啓晴（音響８期）

皆様、こんにちは。本部では毎年の恒例になりました「私の仕事Live版！」を、本年は6月2日(土）に、渾沌会総会～私の仕事Live版～懇親会という流れで実施すべく準備をすすめております。フレンドリーで活発な議論を、卒業生のみならず、現役の在学生諸君も一緒になって、楽しもうとの発想でスタートしましたが、年々、現役学生の参加も増えてきており、頼もしく思っております。

今年は、６月２日(土）に、渾沌会総会を予定してますが、これに引き続いての実施計画です。今回の『語り部』としては

・環境設計［森隆城氏：(株)乃村工藝社／前鶴謙二氏：前鶴謙二設計研究所］
・工業設計［田中雅子氏：日産自動車(株)］
・音響設計［日高孝之氏：(株)竹中工務店技術研究所］

等、錚々たるメンバーが決まりつつあります（1月末現在)。現役学生との交流の意味も含めまして、卒業生の皆様も多数のご参加を、心からお待ち申し上げます。なお、今後に定まる講演者や演題は、随時、「渾沌会WEB」上にて発表予定ですので、ご高覧下さいますよう、お願い申し上げます。

●http://www.alum.design.kyushu-u.ac.jp/

関東支部　新社会人を迎えて

支部長：中村強介（画像２期）

私たち関東支部では、ほぼ２ヶ月に一回のペースで役員会を開催、関東支部の課題について話し合いを重ねてきました。そんな中で、今年もやはり「新社会人懇親会」の開催を主要テーマとして取り組みました。そして、今年もまた、参加、呼びかけについて準備段階に多くの時間を費やす難航のスタートでした。今回は、昨年の新社会人の中から選ばれた若い学年幹事の人達による実行委員会を結成、彼らを中心に、計画から実行までの準備と実施を任せるかたちで進行しました。その甲斐あってか、今回は前回とまた一味違った趣向の演出が盛り込まれ、楽しいひとときを用意してくれました。

支部役員を引継いで２度目となる「新社会人懇親会」の開催は、2006年９月23日（土）の夕刻。場所は都内新宿にあるイタリアンカフェレストラン「コットンクラブ」の地下フロアを貸し切っての盛大な？会となりました。

アトラクションとしても、現在都内にてライブ活動で活躍中の環境33期生の日野良一君（何と彼の父上は小生と同期の環境２期生の日野君だったのです）が新社会人歓迎の意を込めてライブ演奏を催してくれました。彼の奏でる、ブラジルミナス地方に影響を受けたギターと熱唱の数々は楽しくまた情緒豊かで思わず聞きほれるすばらしいものでした。用意された大型スクリーンには、懐かしい30年前からの『火祭り』が映し出され、なつかしさと感動を覚えたのは小生だけではなかったはずです。「懇親会」の方も新社会人を中心に大いに盛り上がりを見せ盛況裡に終えることができ幸いでした。

当日の参加は総数で約65名。私たちの予想を上回る人数で役員一同感激しきりでした。本部・福岡から藤田会長、都甲教授もかけつけてくれ、新社会人同士は勿論、先輩後輩のコミュニケーションも大いに深めることができたと思います。今後このネットワークを着実に拡げ支部活動をともに盛り立てていきたいし、会員の皆さんの理解と同窓会活動への参加を切に願っています。

●http://www.konton.jp/kanto/

関西支部　卒業式で活動を活性化

支部長：今村 滋（環境12期）

関西支部の2006年は支部総会のない年にあたりますが、この年は春の花見が恒例行事です。今年も、大阪城公園で開催しました。例年で言えば新卒者歓迎会を兼ねるのですが、今年は2006年春の卒業者という意味での参加がなく、残念な花見でした。さあ、2007年の春がもうすぐやってきます。卒業式には今回も支部役員が参加させてもらい、関西支部の活動をアピールする機会をいただきたいと考えています。

2007年は支部総会の年で、今のところ4月の前半に開催する予定です。卒業式ではこのことも紹介させていただきますので、今回卒業予定で関西方面に就職される方々には、ぜひ参加して欲しいと思います。

さて、世の中の動きや景気の波はどうでしょうか。最近、大阪市内でタクシーに乗り、運転手から話を聞く機会がありましたが、客足が少しづつですが戻ってきているとのこと。関西は、全国と比較すると少しタイミングを遅らせる癖がある地方ですが、ここにも追い風を吹かせ始めているのでしょうか。新しい2007年が、個人で頑張っておられる卒業生諸氏や関西系の企業にとって、いい年になることを願っています。

【お知らせ】ＨＰが立ち上がっています。
一度ご覧ください。内容の進化はまだまだこれからですが、さらにいい内容にしたいと考えています。『お気に入り』に登録して、時々開いてみてください。支部の会員はもちろんですが、支部以外の皆様のアクセス・投稿も、お待ちしています。

●http://konton-kansai.com/

本部懇親会にて。本部との交流は定例行事として定着しました。

渾沌グッズデザイン募集中!

芸術工学のスペシャリストの証、年度一本の完全限定渾沌会オリジナルグッズを企画してください！

何を創ろう？どう使う？いくつ造ってどう売ろう？あなたの芸工スピリッツをご披露くださいませ！

●問い合わせ先：同窓会HP http://www.alum.design.kyushu-u.ac.jp/　FAX(092)553-4520（河原）

九州大学芸術工学部・九州芸術工科大学同窓会会報 10
■同窓会事務局発行　2007.1.31
■編集長　佐伯正繁（画像２期）
■取材＆写真協力　OB先生他オールスタッフ